



親鸞の生涯 40

『歎異鈔』九条（梯 實田訳）

「お念仏を申していますが、喜びの心は薄く、天におどり地におどるほどの喜びの心が湧いて参りません。また、急いでお淨土へ参りたいと思う心が起つてこないのはどういうわけでしょうか」とおたずね申しあげたところ、

聖人は、「そうか、わたし親鸞もそのことをいぶかしく思っていたが、唯円房、そなたもおなじ心であったか。よくよく考えてみると、天におどり地におどりあがるほど喜ばねばならないはずのことを、そのように喜ばは一定(じきじょう)(達)の身であると思うのです。というのは、喜ぶべき尊いおみのりをいただいていながら、喜ぼうとする心を押さえ停めて喜ばないのは、それはわたしの煩惱の仕業です。しかるに如来は、このような私であることをかねてからお見通しのうえで、煩惱具足のその凡夫を救おうと、

おつしゃつてていることですから、他力の悲願(せがな願)は、(さ)のように浅ましい私どものためであつただと気づかされて、ますますたのもしく思われるのです。

また、急いでお淨土へ参りたいというような思いがなくて、ちょっとした病氣でもすると、これでもう死ぬのではなかろうかと心細くおもうのも、これも煩惱の仕業です。久遠のむかしから今日まで流転しつづけてきたこの迷いの古里(ふるさと)は、苦惱にみちているのに捨てにくく、まだ生まれたことなどな

いお淨土は、安らかな悟りの境涯であると聞かされても、慕わしくおもえないところは、よくよく煩惱の激しい身であるといわれななりません。

まこと名残はつきませんが、終に婆婆(三の世の)縁がつきて、ちから尽きてこの世を終わるとき、そのときに彼のお淨土へおまいります。

なこころもないものを、如来はことに不憫に思つて下さるのです。それを思うにつけてもいよいよ大悲の本願はたのもしく仰がれ、このたびの往生は決定(けいじゅう)であると思つうのです。

お念仏するにつけて天地に躍り上がるほどの喜びがあり、また、急いでお淨土へ参りたいと思うようならば、これは、自分には煩惱がないのだろうかと、かえつていぶかしく思うことあります」

おぞらく八十歳を過ぎた最晩年の親鸞と、はるばる関東常陸から尋ねてときた年若い唯円房との対話の記録です。

常識なら、如来を信じ念仏申している以上生きる一日一日、踊躍歡喜(天地に喜び舞い上がる)日々。早く淨土往生を願うすがたでなければならぬ筈。しかし、現実は。

親鸞はいつも「生の現実」から離れられない。わが子善鸞から背かれ、お同行からも疑われる。愛と憎しみの齟齬。そうした個人的懊惱のみならず。大聖釈迦仏の示したもうた仮教が末法五濁のこの京都での現実の姿から逃れられない自分。

「正像末淨土和讃」「愚禿悲嘆述懷和讃」

晩年著作のこれらの一連の和讃に述懐されている親鸞の逃れられない「煩惱具足」の現実のかなたに、その現実へむけて響く本願念仏

と出遇うのである。「自然(じねん)法縗(まがみ)」「本願成就」の教いであった。

前坊守

は三年余りの闘病生活の末期、

お寺の近くの出石の病院に帰らせてもらつた。

「おあさじ」の鐘の音がききたいと言つた。

自分でその力がなかったので、付き添いの住職に『歎異鈔』、その第九条をよく読ました。

二月 のことより

四日 朗読ボランティアあすなろ
九日 渋谷 博文氏宅法事

一四日 鶴井 雅子様忌明法事
一七日 幸彦氏宅法事

一〇日 平野 重雄氏宅法事

一一日 彼岸月会

一二日 合同役員会

一三日 兼井 儀正氏宅法事

一四日 出石組合社連盟総

二五日 小学校卒業式
会

二六日 みのりを聞く会

二七日 みのりを聞く会

二八日 みのりを聞く会

二九日 みのりを聞く会

三〇日 みのりを聞く会

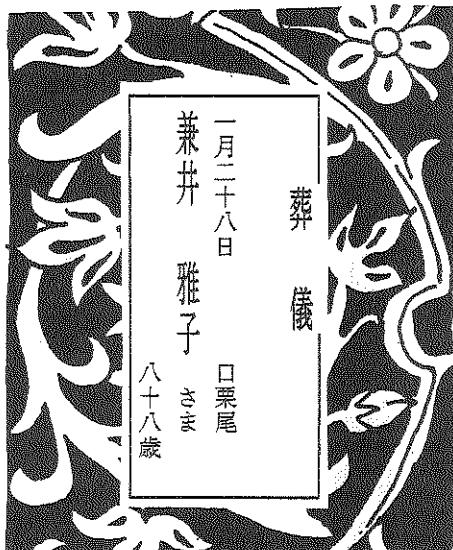
三一 日 みのりを聞く会

三二日 みのりを聞く会

三三日 みのりを聞く会

三四日 みのりを聞く会

三五日 みのりを聞く会



一月二十八日 口栗尾
兼井 雅子さま
八十八歳

ボランティアと
いうこと

わたしのお寺の一月・二月の定例法座のテーマは、「蓮如上人のおみのり」でした。

伯父さんから仏教を学び、周囲の反対を押しのけて本願寺八代目の門主になつたのも三十歳すぎたから。苦労なさっただけに生涯「みんなといっしょ」御同行御同朋、「平座の「ご教化」であったということです。

「仏法は無我にて候」。

これが蓮如さまの仏教理解でありました。事につけ折りにふれてそのことを説かれたそうです。

しかも、そのことを蓮如さまは、教義・理論としてではなく日常生活のうえでお諭し下さっています。

私がメモして感銘したおことは

「仏法には、まいらせ心わろし。これをして御心に叶はんと思う心なり。…」

一般に、「無我」というと、瞑想をして我を忘れ空無の境地にはいることと思いがちだが、お釈迦さまのお説きになつたのは俗人でしかないそのようなことではない。「縁起」といつて、どんなものでも、無数の条件によって成り立つてゐるのであって、一つ二つの關係で成り立つてゐるものはない。まして、「わたし」ひとりの思いでなりたつものはひとつも存在しない。すべてのものは無数の縁によつて生まれ起つてゐるという真理。そういうものの道理をしつかり踏まえて暮らしましょう。これが仏様の教え。

ことに、「私が、◎◎に、◆◆をしてあげた」など、自分個人中心に世界は動くものと考える(我執)そのような自己中心主義をお釈迦様は「無明煩惱のもと」だと戒められた。お説教では、「俺が俺のヲニガ出る」と聞かせて下さいました。「マイラセ心」私はあの人についてことをして上げて、満足していただこう」という思い。「マイラセ心」。「してあげる心」。奉仕の心。ボランティアの心。

この心には「…ノニ」というしつぽが必ず着いてきます。(愛してあげているノニ)(奉仕してあげているノニ)(世話をあげてるノニ)。

このノニがつくと愛の心・奉仕の心・ボランティアの心は瞬時に、反感・恨み・憎しみの心に変わってしまう。

唯識という仏教の心理学でも、阿賴耶識(アキシギ)、末那識(マニギ)の関係で「我執」が絡む人間の心の悲劇を説いてあるとか。

永年、会のお世話をしてくれていた方。テキパキと事務を処理し、厳しく後進の指導もしていたたいたいの方が、ある日突然、

「これほどまでに尽くしてあげてるノニ」とソッポを向いただけでなく、世間に会の非難中傷を言い触らしていらっしゃるとか。

そういえば、夫婦が離婚に至る経緯にも、「私は、あの人には、こんなに尽くしてあげたのに」。この頃よくある幼児虐待も「私、これほど愛してやつたノニ」。ボランティアの世界にも、善意が憎しみに豹変する」とがしばしばあると聞きます。

全て、「この世のみにくさの原因は、そういうえば、「わたしの」善意・愛・親切・慈しみにあるのではないかと思いました。(我癡・我見・我慢・我愛)、蓮如さまは(我がみあり顔・心得顔・物知り顔・独観心)などと名付けておられます。

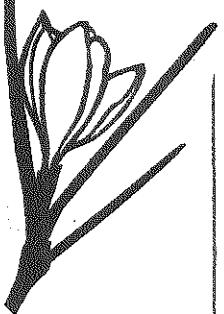
そこで蓮如さまは、先の句のおわりに

「仏法のうへには、なにことも、報謝と存すべきなり」

いつも一緒に定例会にお参りしているお方の遠慮がちなかおことは感銘しています。

ボランティアしていますが、何しろ年寄りですので迷惑のかげっぱなし。それでも皆さん許して下さいます。つまり私は健康のため暇つぶしのため。働かせていただいていることです。

チユーラ・パンダカ (田原利樂院跡)



お彼岸会とはそういう日がありました。
解脱の光輪きわもない
光觸かふるものはみな
有無をはなるとのべたもう
平等覺に帰命せよ

ひとりごと

永井孝一郎

前回紹介したわが家の藤棚のそばに、樹齢百年ほどの『大御所柿』があります。大きく繁りすぎたので枝の剪定を頼みました。結果樹勢もよく、果実も大きくおいしくなったようになります。ところが地上5m位の處に「シユロ」の小枝が寄生しているのです。不思議なことです。

寄生するまでの気象条件・環境条件などいろいろいろな数多の条件の重なつてのことです。不思議というほかありません。

ものごとは、すべて、こんな不思議な条件が幾重にも重なつて始めて成立することを、わたしは目の当たりにしました。

人の社会でも、沢山の出会いと会話があるて、そのなかで新しい新芽がふくらんでくるのではないか。この寺報に沢山のひとが参加して、いろいろな思いを出し合ってみようではありませんか。何かが芽生えたらすばらしいですね。